

縮小を縮充へ

～「参加」が創り出す人口減少社会の希望～

(株)studio-L 代表、東北芸術工科大学芸術学部コミュニティデザイン学科長・教授、
慶応義塾大学特別招聘教授

山崎 亮

今日のテーマには「縮小を縮充へ」という言葉が使われています。私の著書に『縮充する日本』という書があります。人口は縮小するものの充実したまちづくりを目指そうという意図で書き進めました。みなさんと縮充という問題意識を共有したいと思っています。

縮充とはなにか

「縮充」という言葉から説明します。縮んでいくという表現には寂しさがつきまとうようです。私は人口が減っていくのはしかたがないことだと考えています。かつて地方は「過疎」「限界集落」という表現を用いて、主に中央に危機感を持ってもらうよう働きかけました。限界集落という言葉が使われ始めた当時、表現に賛否がありました。言葉の響きにとらわれ、限界集落という言葉を生んだ社会学者の大野晃先生の本意が伝わらなかったと私は感じています。大野先生によれば、人口が20人以下で半分以上が65歳以上、なおかつ自分たちで集落を運営する力がなくなっている状況が限界集落に相当します。しかし運営力のあるなしを調査するのは大変な作業ですから、年齢構成だけで集落を判断してしまう傾向が広まったように思います。

限界集落という言葉の扱い方が、果たして正しかったかどうか、私にはよくわかりません。6世帯しかないような集落でも、ものすごく元気な集落はいっぱいあります。元気な小さな集落に目を向けていけば、今日における限界集落への一般認識は違っていたかもしれません。

過疎、縮減、縮滞、縮小という言葉が使われ出

すと、地域は「もうだめだ、息子や娘は都会へ出る」という雰囲気になってしまいがちです。しかし、人は減っても充実した暮らしというものがあります。縮充という言葉は私の造語ではありません。「縮充ウール」という製品群があります。毛のセーターは洗剤を入れて洗うと縮むことは知られていますが、縮む特性を生かし、マフラーのように、毛がぎゅっと詰まった暖かさを感じられる製品がつくられています。まちづくりにおいても、人口は減っても手を加えれば温もりのある地域ができると思います。キーになるのは活動人口の比率をいかに高めるかにあります。活動人口の比率を高めるには住民の意識改革が必要です。手間も時間もかかりますから、取り組もうとする政治家にとっては危険なかけになるかもしれません。住民が「地域は私たちが運営する」「私たちが地域を変えていく」という気持ちにならないと、陳情頼みの行動から抜け出せず、行政コストは下がらず、とても縮充には至らないでしょう。

私は建築設計をやってきたデザイナーです。農家や6次産業を指向している人たちから依頼され、特産品を開発するなど、互いに喜び合った経験をしてきました。しかし、当事者以外の住民からすれば「何をやっているのだろう？」といったレベルの話にすぎません。参加していないのですから当然です。

役場が建築家に頼んで格好のいい建物を建ててもらおうとします。多くの住民にとっては降って湧いたような話かもしれません。最初こそ喜んで建物を使っている、やがて、使いにくい、寒い、暑い、塗装の仕上がりが悪いなど、文句が出るのが常です。事前に住民はどう使いたいのか、できあがった後、

山崎 亮 (やまざき りょう)

略歴

1973年愛知県生まれ。大阪府立大学大学院および東京大学大学院修了。博士(工学)。

建築・ランドスケープ設計事務所を経て、2005年にstudio-Lを設立。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。まちづくりのワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、市民参加型のパークマネジメントなどに関するプロジェクトが多い。

主な著書

『ふるさとを元気にする仕事』(ちくまプリマー新書)

『コミュニティデザインの源流』(太田出版)

『縮充する日本』(PHP新書)

『地域ごはん日記』(バイインターナショナル) など



維持管理にどうかかわるのかといった、住民参加の過程がないと文句を言うだけに終始してしまいます。役場といっしょにいろんな事業や施策に取り組めば、人々の意識は変わり活動人口が増えます。

活動人口の統計はありませんが、かつては活動人口が占める割合は高かったと思います。地域によって呼び方は違うかもしれませんが、地区には結、講、連、座、衆、組などがあって、自分たちの地区を運営する仕組みが働いていました。仕組みが薄れる転機になったのは戦後、1950年代か1960年代でしょうか。「私たちは税金を払っているのだから、公共サービスは行政がやってよ」という風潮が広まりました。時代を顧みれば、善し悪しを断じることはできません。重要なのは、いずれ人口が1910年レベルになるかもしれないという過程にあって、「まちのことはなにもやりません」という人たちが増える、つまり活動人口が少なくなると地域が立ち行かなくなるということです。まちづくりは広範囲です。うち1つでも2つでもいいから住民参加型にすべきだと考えます。行政職員にとっては手間がかかり煩雑さが増しますが、住民参加の機会をつくらない行政運営を続けていくと、事態はいつこうに変化しないと思います。

多様化する参加型の形態

『縮充する日本』という本で、私はまちづくりを分野別に整理して8章立てにしました。最終章は本丸だと考える教育を充てました。8章の中から、おそらくまだ広く理解されていないと思われる動きをいくつか取りあげてみます。

芸術分野ではソーシャル・エンゲージド・アートという言葉が広がっています。今、多くの芸術家は、地域の人たちと創作活動をしています。近くに住む芸術家を応援したいという地元の人がいて、参加型のアート活動に発展しています。「大地の芸術祭」「瀬戸内国際芸術祭」を耳にされた人もいます。芸術祭では、住民が「こへび隊」「こえび隊」と称する案内役を結成するなどイベントの運営を担っています。プロがつくった作品を鑑賞するだけでなく、社会と関係を持つアート、あるいはコミュニティアートといわれるような芸術活動が行われているのです。

娯楽分野にも類似した点があります。YouTube(ユーチューブ)、Tumblr(タンブラー)、あるいは音源キャラクターの初音ミクにしても、素人たちが撮った映像、創作された音源や映像がウェブにアップされ、多くの人が楽しんでいます。

情報も同様です。典型がOSのLinux(リナックス)です。マイクロソフト社のWindows(ウィンドウズ)もアップル社のMacintosh(マッキントッシュ)OSも、プロによるプログラミングですが、Linuxは世界中みんなで寄ってたかって開発されているOSです。Linuxの導入も随分普及してきました。身近な例ではケータイのAndroid(アンドロイド)があります。Linuxの考え方をデバイスに取り入れようとしたのはGoogle(グーグル)という会社です。みんなで改良を加え、みんな自由に使おうという試みが、新たな価値を創造しているのです。

Web2.0、ブログ、Wikipedia(ウィキペディア)も同様です。Wikipediaが登場した十数年前、みんなで作る百科事典なんて誰も信用しないだろうと

思われていました。しかし今やウェブで何かを検索すると、上位に表示されるのがWikipediaの情報です。Wikipediaに記載されている内容に間違いがあれば、気づいた誰かが上書きして修正していきます。修正を繰り返すことで内容の確かさが高まりました。真実かどうかは別です。多くの人が信じやすい事典、辞書になったということです。

バージョンアップする「市民参加」

「市民参加」は古くて新しい言葉です。これまでの参加と新たな参加を考えてみましょう。

戦後の民主主義下で語られた市民参加をバージョン1.0とすると、バージョン2.0の移行初期は、学生運動が活発だった1968年から69年ぐらいだと思います。70年ぐらいになると、自分たちの意思をよりはっきりと表現するようになりました。2.0へのバージョンアップだったと私はみています。その後、物事に反対ばかりしているようなシーンが増え、もやもや感のある市民参加が続いたように思います。90年代に入ると転機がきます。95年の阪神・淡路大震災です。「ボランティア元年」といわれましたが、反対だけでなく、自分たちで行動を起こそうという雰囲気が広がりました。98年にはNPO法ができて、市民参加は3.0にバージョンにアップされたと思います。アップグレードされるまでそれぞれ約25年です。次のバージョンアップである4.0は、東京オリンピックがある2020年ごろになるかもしれません。

では、市民参加4.0ではなにがどう変化するのでしょうか。テクノロジーがキーになると私はみています。社会にシェアしていく仕組みがもたらされると思います。

アメリカにUber（ウーバー）という会社があります。一人で車を運転している、空いている席がある、ならば乗車希望者を乗せませんかという発想でサービスを展開しています。Airbnb（エアビーアンドビー）は、住居に空き部屋があるなら、誰かに一定期間だけでも泊まってもらおうよ、という発想でシェアビジネスをしています。みんなでシェアできる参加型ビジネスの動きです。空き空間をみんなで共有するコワーキングスペースやシェアオフィスもあります。さらに資金集めとしてクラウドファンディングもよく知られる存在になりました。

2017年現在、市民参加バージョン4.0の内容はかなり見えています。

ツールを活用して一步を踏み出す

これまで話してきた内容には横文字がずいぶん含まれています。やがて日本社会に浸透し、横文字の使い方も徐々にこなれてくると、日本語で表現できるようになるでしょう。現時点で認識していただきたいのは、人々が協力し公共圏をつくっていくという意識とITツールの連動が、新たな市民参加をもたらすということです。

かつての市民参加型にとらわれてしまうと、縮充の時代を築くには不足感があります。従来の自治会や町内会に頼りきりの地域もあると思いますが、新しく生まれる繋がりもうまく活用していくと、取り組みの可能性も広がるでしょう。

終戦時、GHQが町内会などの解体令を出しました。SCAPIN（連合国最高司令官指令）を出したのは、町内会などを戦前の国家総動員に至った一要因として危険視したからです。同時にやったのがParent-Teacher Association（PTA）の創設と、COS（社会福祉協議会）の導入でした。つまり町内会が担っていた教育・福祉機能を公から除外し、町内会の権力を相対的に低めて、人々が町内会に入る理由付けを弱めたのです。そんな時代をわれわれは70年ぐらい過ごしてきました。今、「町内会に期待しましょう」といわれても、参加者が減ってきた町内会にとっては大変です。代わるように、まちづくり協議会や小規模多機能自治などの動きが出てきましたが、充分とは言えない状態だと思います。

では、みなさん、どうやって参加型を刷新していきますか。1つの足がかりが市民参加バージョン4.0にあると思います。

高齢者はスマートフォンが使えないという都市伝説がいまだにあるそうです。しかし、スマートフォンの講座を開設すると高齢者が殺到します。Facebook講座をやってみてください。スマートフォンやタブレット操作なら、高齢者でもすごい勢いで覚えていきます。受講される人は律儀で、Facebookで「いいね！」ボタンを必ず押してくれます。「孫がやってきた」「娘がきたよ」と発信すれば、みんなが「いいね！」ボタンをクリックします。道

具を考慮した進め方を模索すべきでしょう。穴を掘ろうとしているのに、スコップの使い方が難しいからスコップをあえて使わないという理屈が通るでしょうか。スコップの使い方を教える、覚えたほうがいいでしょう。

「地元が気づかないおもしろさの発見」

お手伝いした地域の具体例をいくつか紹介します。

私たちは、香川県の観音寺市まちなか再生計画づくりへの参画を頼まれました。商店街の店主と顔を合わせたのですが、店主たちは最近の話はなかなかしてくれません。実はこの現象、会話の流れは日本全国どこでもほぼ同じです。かつては「にぎわっていた」という話はあっても、最近の話をなかなか言い出してくれません。そして、にぎわっていたころの話を終えると商店主の皆さんの目が若干悲しそうな目になります。「2000年ぐらいになったらもうほとんど人が歩かないようになってしまったのです」という展開になります。さらに「もう最近では猫すら歩いていません。というも猫に餌をやる人間がいなくなってしまったのです」という話になります。私たちとすれば商店街にあるおもしろさを増幅したいと思っているのです。しかし「おもしろいところがあったら、こんな状態になっていないでしょう」というのが商店主の皆さんの論理です。

「それなら私が探してみます」ということで商店街を案内してもらいました。そうしたらありましたよ。店の中に別の店が入っている店舗があったのです。下着屋さんの中にケーキ屋が入っていたのです。下着屋の店主に事情を聞くと、パティシエである息子さんが駅前に2件目のお店を出そうかと考えていたが、開店資金の負担などで悩んでいた。「それなら店内の棚を寄せてあげるから、ここでケーキ屋をやれ」という運びになったそうです。秀逸だと思いました。下着店にはいろんなサイズが用意されています。ケーキ太りは大歓迎です。

ほかにもありました。花屋をメインにした雑貨屋にはカフェ、着物屋さんにはパン屋さん、クリーニング屋には餃子屋が入っていました。私はシュールな感じがいいなと思いました。

開業の初期投資で悩んでいる若い人がいる。ならば「ここでよければやってみなはれ」という店主の

思いがありました。営業時間の制約があるものの、スタートアップ期の店舗としては使い勝手がいいようです。

公共空間、空地の活用は、コミュニティデザインでも検討される課題です。ただ、私が観音寺の商店街で注目したのは、営業中のお店を活用していることでした。店主たちはもう引退してシャッターを閉めてもいいけれど、若い人たちが開業資金などで悩んでいるなら「やってみなはれ」と店を開け続ける判断をしました。リタイアして日々ゴロゴロ、ぜいたくな食生活をおくって生活習慣病に悩むような日常を選ぶことも可能だったかもしれません。開業を志す若者の存在が高齢店主の不健康な生活を回避させたとみることもできます。こんな発見は初めてでした。

私たちはいつも新たなプロジェクトをやりたくなります。有名になった島根県隠岐郡の海士町で「山崎は何をしたのだろう、うちでもやってくれ」という依頼がきます。出かけていくと、海士町とは違うまちづくりをしたいと思うのです。地域が違ったら人が違うし、首長の意味も、職員の志も、訪れる人たちも違う、その人たちの組み合わせにオリジナル性を見い出したいと思ってしまいます。

さて、観音寺の商店街で新たな発見をした私たちは、ショッピングインショップを促進しようとチラシをつくりました。制作過程で新たなショッピングインショップがあることを知りました。仏壇屋の店内にビリヤードバーが入っていたのです。おそらくまだ知らないショッピングインショップがあると思いました。プロジェクトの基本は、店の組み合わせの妙で、人をうならせるような商店街にすることに固まりました。

しかし、商店街の賛同がなければ進められません。商店主の気持ちを本気にさせるのも私たちの仕事です。この時代、どう生きて、どう次の世代に引き渡していきたいのかをじっくりと話し合いました。さあ、活動が開始されました。補聴器店にはタコ料理店が入りました。タコは瀬戸内海の名物です。地元には「たこのやーちゃん」という若い夫婦が切り盛りしている繁盛店があるのですが、店が手狭になり、チラシを見て応募してくれたそうです。補聴器店の店主は70歳ですが店を続けることになりました。店主は若い人に触発されたようで「やぎひげcafe」を開店しました。新しいことをやろうという気力が湧

いたのでしょうか。

呉服店にはアーティストが入居して手ぬぐいをつくっています。細かい織り模様を拡大したデザインが施されています。観音寺には土産品と呼べるものが多くはなかったようですが、1枚700円という手ごろ感もあって若い人たちが大量買いしているそうです。

観音寺の商店街には約150の店舗があります。30人の店主はショップインショップに同意してくれました。残る店舗にも協力してもらおう狙いもあって「パンストリート」というイベントを開催することにしました。地元のパン屋さんはもちろん、地域のお母さんたちが手づくりパンを焼いて、フリーマーケット式に売る試みです。ショップインショップに賛同してくれていない約120店舗のうち33店舗がイベント日、1か月に1回だけなら場所を貸してもいいと協力してくれました。パンストリートは大人気で、眼鏡屋さんの店舗にパンを買い求める長蛇の列ができます。眼鏡屋さんのオーナーにとっても悪いことではありません。手づくりパンはいつも午前中に完売です。

参加型がもたらす人づくり

私たちが地域で支援する仕事は、スムーズに進んでも3年ぐらひはかかります。その間、ワークショップを重ね、まちの未来企画を考えてもらいます。次いで社会実験を試みます。いろいろな行動が求められます。人々が動き出すための応援も私たちの仕事です。

今年でお手伝いさせていただいてから10年目になる大阪府の公園整備プロジェクトがあります。公園敷地内には府民が整備するエリアが設けられました。公園整備には諸知識を必要とします。植生、生態系、土壌などを学んでもらうパークレンジャー養成講座を設け、これまでに100人以上のパークレンジャーが誕生しています。当時の大阪府知事は交代しましたが、住民は参加型の公園整備活動を続けています。時間資本とっていいかもしれませんが、時間をかけて参加型で進めると人が育ちます。大阪府が得たものは府民による公園整備だけではなく、パークレンジャーという人であり、府民の意識変化です。

縮充を意識すると、府民や議会にどう説明するの

か、頭の使いどころが変わります。お金をたくさんくれよという作文ではなく、ゆっくり進めさせてくれという根拠、説得力が必要になります。当時の府知事がどこまで縮充を理解されていたかわかりませんが、首長の決断は地域に有形無形の資産をもたらしたと思います。

住民が歩きたくなる道路

千葉県の睦沢町では、県道85号線の拡幅工事と連動して、人々に歩いてもらう道づくりを模索しました。歩ける空間、歩きたくなる出来事、歩きたくなる仲間という3要素を検討しました。

ワークショップでは、必要になる人数と要する時間軸を設けました。交流拠点づくりは時間がかかる、フットパス、散歩道をつくろうとすれば多くの人の協力が必要になるなど、検討事項を整理していきました。その過程で今すぐ取り組めることがあり4つのチームが行動しています。

チームの1つに「こちゃ倶楽部」があります。地元にはちょっと休もうという小茶という言いまわしがあるそうです。住民は役場と相談して、県道沿いの元魚屋の店舗を貸してもらうことになりました。ただ、元店舗は上を見れば空が見えるぐらい荒れていて大きな改修費を要します。そこで倶楽部は、町内で催されるイベントに物販ブースを設け、うどんや唐揚げを売って資金を稼ぐことにしました。行動開始から5か月後、改修を終え小茶する空間ができました。

実はうちの若い女性スタッフは、彼女なりのおしゃれ感ある空間を想定していました。しかし、ワークショップで参加者たちは「壁に竹を張りつけよう」「フリルのカーテンがついた空間にしたい」などと言い出します。私たちはデザインについては任せほしいとお願いしたのですが、彼らは自分たちが望む装飾品を持ち込みました。社内で議論を重ね、彼らが考える空間を優先させる判断をしました。町民が参画すると混沌としたカオスな状態になるのが常ですが、まちづくりの原動力は地域の人々です。

行政のかかわり方

会場のみなさんからいくつかご質問をいただき

ました。

民間と行政のかかわり方について、お答えさせていただきます。

あるプロジェクトが始動します。当初、自治体職員は議事録づくりや司会進行などの運営に追われますが、地域住民のみなさんはそれを見ているだけ、という状況が多く見られます。しかし最終的には住民主導でやっていけるスタイルをつくるのが望ましい。ですから自治体職員の人にはなるべく後ろに下がってもらうようにしています。私たちは3年しか通えないし、自治体職員には異動があります。3年ならその間に、住民のみなさんに私たちのやり方を全部盗んでほしいと思います。

「本丸は教育という意図」

次いで教育という観点を補足したいと思います。「ラーニングピラミッド」という学習効率性を示した図があります。教え方によって1週間後の平均学習定着率が異なることを図示したものです。先生が一方向的にしゃべる講義では受講生は5%ぐらいしか覚えてない。読書なら理解度は10%です。ビデオを見る、グループ討論、デモンストレーション、ワークショップといったアクティブラーニングならば50%ぐらいです。体験を伴う教育では75%ぐらいに上がります。最も効果があるのは自分たちの失敗や成功体験を語ることです。語る立場になると90%ぐらいに上昇します。私は大学の教員として学生に話しをします。大学の先生は語ることで物事を自身に90%ずつ刻んでいく。一方、学生たちは聞くだけですから内容の95%を忘れてしまう。

本日の講話もずっと聞いているだけでは平均学習定着率は高くないかもしれません。しかし、より多くのネタを仕入れて帰ってください。役場に戻ったら、仕入れたネタを職員に伝えてください。内容は受け売りでいいのです。ほかの人に教えるという行為があれば学習率は高まります。

教育の3要素に、学校教育、家庭教育、地域教育があります。地域教育は社会教育と言ってもいいかもしれません。地域の方々が生涯学べる環境を整えていただきたいと思います。まちに対する意見、まちにかかわる姿勢を子どもたちに語

ることができたら理想です。大事なのは大人たちに学ぶ場があるかどうかです。「こんなまち、何にもない」「あんたは東京へ行きなさい」などと軽く言いはなつ大人たち、あるいは文句ばかりを並べ、学校の先生をばかにしているような姿は見苦しいし、子どもにとっても望ましくないと思います。大人が学べば子どもたちにも波及します。住民参加型のまちづくりで意識が変われば、家庭内での発言が変わってきます。参加型を促進すれば人が育ちまた新たな人も育つと思います。

「卒業のタイミング」

プロジェクトから行政が手を引くころ合い、卒業のタイミングが難しいという声をいただきました。

重要なことは人の出入りを明確にすることにあると思います。定期的に新入生の勧誘する仕組みが必要ですし、年長者を除くことの明確化も必要です。

もう1つの観点に、チームの解散を明確にした事前設定があります。プロジェクトが話題になったり、成果を上げたとしても、かかわった人は一定期間後、任務から退きチームを解散する、あるいは人を総入れ替えして後任に託すのです。そのときどきに適合したチーム力というものがあります。例えば形成期においては、わくわく感があって盛り上がっているケースが多い。ところが、しばらくすると「どうもあいつの物言いに腹が立つ」「口ばかりで動かない」といった混乱期が訪れます。混乱期を抜けると秩序期が訪れます。「あいつは口ばかりだけど、こう使ったらうまく動く」「動けない人だけだけどいいアイデアは持っている」とか、人を見る目が深まっていきます。人を知ればチームの機能が高まります。どんなプロジェクトチームでも必ず経る過程ですから、けんかをしたとしても別に落ち込む必要はないのです。

チームをいつ解散するのか、事前に決めておくのは悪いことではありません。人はまた新たなまちづくりに取り組むことができます。

市町村長のみなさん、縮充という視点を持ったまちづくりを住民とともに模索しませんか。人が育てば地域は充実していくと思います。